

EVENT 八月

3日…七夕天役（惑星ハンダグチの全道路清掃草刈り作業）基本各家出席。朝八時半～私出席。

8日～13日…すま子姉初盆（東京～長野）私、母出席。

21日…家前道路拡張工事準備経過報告会（集会所）夜七時～私、母出席。

27日…家前道路拡張工事土地買収調停。（自宅）私、母対応。

31日…五蔵岳生産森林組合現地立ち会い作業。朝九時～五蔵岳下。後、説明会（橋川内公民館）私、母出席。

九月

12日…農産組合会（橋川内公民館）夜七時～私出席。

20日…古川寺お彼岸参り朝九時半～母出席。私送迎。

21日…中山間地の会（橋川内公民館）夜七時～私出席。

28日…松田家一周忌供養（吉井町サンパーク）十一時～母出席。

席。私送迎。

29日…老人会日帰り旅行（嬭野）母出席（荒天にて中止）

PICK UP 土地の問題

家の前の市道が幅増しになる。関係する地主全員、工事には賛成で、特に問題なく準備が進んでいる。先日は買取調停だった。その時、道路になる予定の我が家の土地が不正時代、抵当に入っている事が初めて判った。私は勿論、母親も初耳のことだ。先祖が当時の近郊の方とそうやっていて。相手の方の御子孫も健在でその事を伝えると、先方さんも全く知らなかったらしい。互いの先祖が当時は口約束で通っていたのだろう、そのまま今日まで至ったというわけだ。さて、これを戻すのは、互いの子供たちの実印による書類、各印鑑証明書など大変な作業となる。幸い今回は佐世保市の方がやってくれる事になりホッとす。

一方、地域の人々三十五人共同で所有している山林があるそうで、その中に作業用の道を作る事になり、関係者全員が立ち会うこととなった。刃部山奥北側急斜面。こんな土地持ってもしょうがないじゃないか、脱退したら？と母に言う人が、その土地を譲り受けてくれる人がいれば可なのだが、誰も欲しがらないそうだ。皆自分の分を持って余し気味。抜きたいと言う人は他にもい

る様子。関係してただけで年間五千円。毎年会合に出席しなくてはならない。欠席は三千円の支払いだ。田舎暮らしとすれば必ず話題になる「土地」について、この度はいやでも考えを巡らすことになった。都会育ち等で土地と御縁のなかった方は、それでも土地を持つてる人を使うらやましいと思われるかもしれませんが、たまたま読んでいた本、『半農半Xという生き方』塩見直紀著（ソニーマガジン新書）に興味深いことが書いてあった。少し長いのですが、以下引用。

人にはどれだけの土地が必要か

「祖先が残してくれた田畑や山林で農作業していると、また、廃校となった（「里山ねっと・あやべ」のオフイス）にいと、必ずといっていいほど、脳裏を去来する先人のことばがある。その一つが、トルストイの「人にはどれだけの土地が必要か」という寓話だ。——ロシアの田舎に一人の農民がいた。初めは貧しい小作人だったが、ようやく貯めたお金で少しの土地を買ってからは、暮らしも少しよくなり、毎日を楽しみく過ごせるようになった。しばらくすると、もっと広い自由な土地が欲しいと思うようになる。以前の何倍もの肥えた土地を見つけ安く手に入れると新しい広い土地も、まだ狭苦しく思えた。ある日、夢のような村の存在を知り村に向かった。村長は「日の出とともに出発し、日没ま

で戻ってくれば、行った土地が全て手に戻る。出発点に戻れない場合はすべて失う」と説明した。翌朝、日が昇ると、男は東に向かつて歩き出した。行くところ、見るものすべてが欲しくなった。自分があまりにも遠く来すぎたことに気づいたときは、日もかなり西に回ったところだった。太陽は刻一刻と地平線に近づいていく。半狂乱でひたすら走りつづけ、倒れ込みながらゴールのしるしをつかんだ。村長が「あなたは望んだだけの土地をすべて手に入れた」と叫んだとき、男は口から血を出して息絶えた。太陽が地平線に沈むのと同時だった。彼の従者はシャベルをとって穴を掘り、男を土に埋めた。その穴の大きさだけの土地が、彼に必要な土地の全てであった。私たちはこの男を笑えないだろう。この男とは私たちであるからだ。」（以下略）

昔頑張って広い土地を持った家庭皮肉なこと今、その管理に困窮している。高齢化し後継者がいないのだ。この問題をムラ社会だけで解決しようとするのは、介護をその家庭だけでやろうとすることと似て無理がある気がする。介護に、デイサービスやヘルパーが必要なように、これも第三者の助けが必要なのだ。日本の食料自給率は40%。その担い手は全人口の3%の人たち。その担い手の三人に二人は六十歳以上だそう（前掲本より）。今、農業は皆さんの参加、手助けを待ってマス。